

『歎異抄』、『唯信鈔文意』に続き、当センターでは、『尊号真像銘文』の現代語化に取り組んでいる（概要については本誌四〇号参照）。

その冒頭を飾るのは、『無量寿経』にある「至心信樂の願文」である。「無量寿経」では法蔵菩薩が、覺りを得るに先だつて四十八の願い（本願）を説く。その十八番目に登場するのがこの願である。ただしこの願は、親鸞にとつて、いくつもある願のうちのひとつにすぎなかったわけではない。師である法然がこの願を「王本願」と呼んで大切にされたように、親鸞にとつてもこの願は、「信心」を語る願として、最も大切な願であった。

念仏とは何か？ なぜ念仏するのか？ このように問うならば、親鸞ならば例えば、「そこに、私が今、ここにあり」ということすべてが尽くされているのだ」と答えるのではないだろうか。この問いは、「私はなぜ生きていくのだろうか」という問いによく似ている。この問い以前に、事実として私たちは生きており、生かされている。無限に広がるいのちの結びつきからの、「生きよ」という呼びかけが、私たち自身のなかにはたらいている。「充実した人生を送るためにはどうしたらよいだろうか」、「どうしたら人を幸せにできるだろうか」というのが、私たちの日常的な発想である。しかし、今回の「銘文」が伝えてくるのは、このように自分であれこれと考える以前に、「わが願いを信じて、念仏せよ」という如来の誓いが確かにあったのだ、という感動である。「尊号真像銘文」最初の銘文は、親鸞の抱いた、この根源的な感動と共にある。

（研究員 内記 洸）

『尊号真像銘文』試訳①

現代語

「大無量寿経言」というのは、「大無量寿経」という経が、阿弥陀如来の深い願い——私たちがのありようをその生活の根っこから揺り動かすような、本当に大切な願いである第十八の願——を四十八に開いて教えてくださっている、ということ。『大無量寿経』は、ここに述べられている「信心」の願をこそ、「言わん」としているのです。

「設我得仏」というのは、「私が『仏』になったときには、このようであってほしい」という、あらゆる存在へと向けられた、如来からの願いの言葉です。

「十方衆生」というのは、どんな場所で生まれ、どんな環境で暮らしているようと関係なく、この世に生まれてきたすべてのものが、ということ。生きとし生けるあらゆるものがみんな一緒に、と呼びかけられているのです。

「至心信樂」の「至心」とは、嘘や偽り、疑いなどがまったくない、純粋な「真実」のことです。真実である、と言えるのは、如来がその「名」において確かに、心から誓ってくださいということの真実性だけであって、この事実を指して「至心」と言うのです。これに対して、私たち自身の「心」はどうでしょう。この世に生まれてから死ぬまで、いろいろななかたちで湧きおこってくる心に苦しみ、そこから逃れられる人など誰もいません。私たちの心は、「ああしたい」という欲望、「こうなりたい」という願望に追い立てられることに始まって、イライラしたり、我慢できずにカーッと腹が立ったり、あるいは人のことが気になって一喜一憂、うらやんだり妬んだりする気持ちで一杯です。嘘偽りのない真実の心だとか混じりけのない純粋な想いだとか、そんなものもそもそも、私たち自身内にはないのです。自分からは何が真実か、決して決めることはできません。どんなことでも私たちは、偏った、濁りある眼でしか判断できないのですから。

原文

「大無量寿経」に言わく、「設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我国 乃至十念 若不生者 不取正覚 唯除五逆 誹謗正法」文

「大無量寿経言」というのは、如来の四十八願をときたまえる経なり。「設我得仏」というのは、もしわれ仏をえたらんときという御ことばなり。「十方衆生」というのは、十方の、よろずの衆生というなり。「至心信樂」というのは、至心は、真実ともうすなり。真実ともうすは、如来の御ちかいの真実なるを至心ともうすなり。煩惱具足の衆生は、もとより真実の心なし、清浄の心なし。濁悪邪見のゆえなり。

（原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五一二頁）

参考

（頁はすべて「真宗聖典」）

「現代語」としては、テキストを参照することなく、それだけで読むことができる、ということの基本方針としている。それはつまり、「現代語訳」ではなく「現代語」として、聖人の言葉に向き合っていく、ということだ。現代の言葉へと意味を開くにあたって参照した、他の聖教の言葉の一端をここに示す。

◆「大無量寿経言」というのは、……

- 如来の本願を説きて、経の宗旨とす。すなわち、仏の名号をもつて、経の体とするなり。（一五二頁「教行信証」「教巻」）
- 如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。五濁悪世の群生海、如来如実の言を信すべし。（二〇四頁「行巻」「正信偈」）

◆真実（の心）

- 今三心の字訓を案するに、真実の心にして虚偽雜ることなし、正直の心にして邪偽雜することなし。真に知りぬ、疑蓋問雜なきがゆえに、これを「信樂」と名づく。「信樂」はすなわちこれ一心なり。「心はすなわちこれ真実信心なり」（二二四頁「信巻」）
- 「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御ことばなり。（五三五頁「一念多念文意」）
- 煩惱具足の衆生。凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。（五四五頁「一念多念文意」）

（訳：親鸞仏教センター）